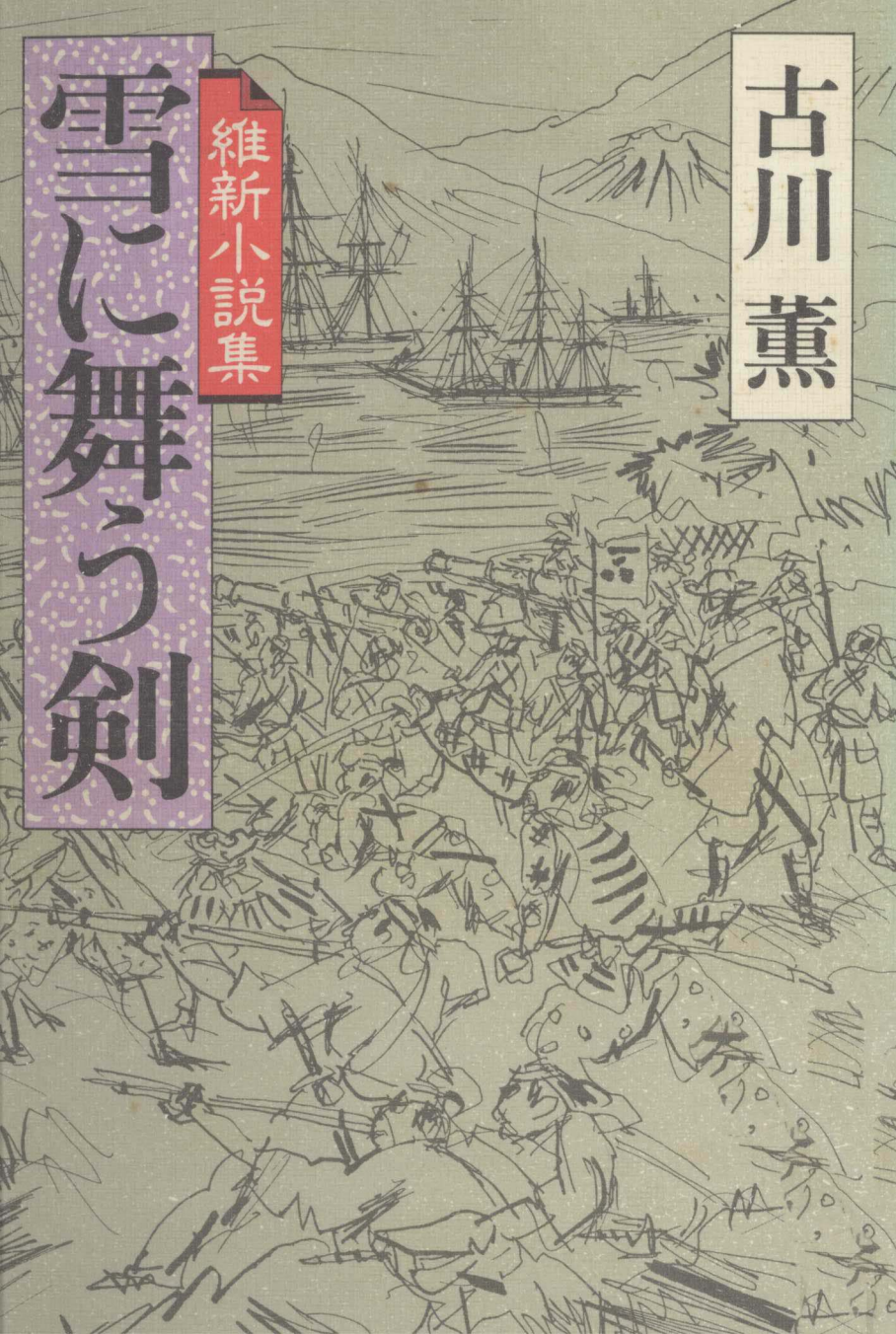


古川薫

維新小説集

雪に舞う剣



雪に舞う劍

定価 一五〇〇円（本体一四五六円）

著者 古川薫

一九九二年三月十日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 五三九五―三五〇五 (編集部)

(〇三) 五三九五―三六二二 (販売部)

(〇三) 五三九五―三六一五 (製作部)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Kaoru Furukawa 1992 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本に

ついてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願

いいたします。

維新小説集

雪に舞
紅
金蔵

古川薫

江蘇工業学院図書館
蔵書章

講談社

維新小説集

雪に舞う剣

装画 三井永一
装幀 安彦勝博

青 梅……………130

春雨の笛……………170

歳月の鏡……………210

春しゅん
雪せつ
の
門もん

参拝をすませて、境内の裏門にあたる小さな鳥居の前まできたとき、千秋は呼びとめられた。声は右手の樹林のなかから、あたりにはばかりのように響いた。ふりかえると、楠の太木のそばに、瘦せた長身の太庭誠之介が、うつそりとたたずんでいた。

呼びかけたまま動こうとせず、自分のほうに來いと無言に命じているのも、一年前と同じで、この瞬間の再来をひそかに願うさきほどの祈りが、たちまち聴きとどけられたようで、なんだか恐ろしくもあった。

自分のからだの中を、かすかに走る淫らな思いへの後ろめたさに脅えながら、千秋は、ちらりと前方に目をやった。鳥居のむこうに、武家屋敷の土塀をつらねた細い道が、傾きかけた午後の陽をあびて、一直線に走っている。人影はなかった。

千秋の父佐野甚左衛門の屋敷は、その路地が尽きたところ、城下では追い回しといわれる迷路の一角にある。二百石の侍としては、ちょっと不相応とも思われるほどの大きな長屋門を構えた役宅である。

ためらい気味に、しかし胸をときめかせながら、千秋はほの暗い樹林に厚く散り敷いた落葉を踏みしめて、待っている誠之介の前に歩み寄った。

「家においでくださればよろしゅうございますのに。近ごろお姿が見えませんかですから、

父も氣にしておりました」

わざと快活にいったが、語尾がふるえているのは、早春の冷気のせいばかりではなかっただろう。

「あれこれと、忙しく……」

誠之介は、ことばをにごし、千秋の澄んだ切れ長の目に見上げられて、急に視線をそらしてしまう。

「いかなさったのでございます」

「実はその、話したいことが、あります。申しにくいのだが……」

「おっしゃってくださいませ」

と、千秋はすこし頬をこわばらせた。気丈な性格が、もう首をもたげはじめている。誠之介の用件は、自分が戦き期待するようなものではないと気づいたからであった。

「話はなかったことにしてもらいたいです」

「訳を、おっしゃってくださいまし」

「それは千秋殿の父上にある」

「父とわたくしは別の人間でございましょう」

「そうはいかぬのだ。私は近思組に誓いをたてた者、どうしようもない」

「それで縁談を壊すと仰せられますか」

「やむを得ぬ」

「ご用はそれだけでございますか」

「いや、明朝、三人の刺客が佐野家を襲うことになっております。その一人がかく申す私です。籤で決まったのだ。もうあとには退けません」

「無体な。なぜ父を殺さなければならぬのです」

「甚左衛門殿のなされていること、千秋殿も存じておられるだろう」

「父が藩士から恨まれてゐることは知っておりましたが、それは殿様に命じられての仕事でございましょう」

「お家のため、甚左衛門殿に犠牲になっていただくほかはない」

「仰せられていることが、わたくしにはよくわかりませぬ」

「殿様をいさめるには、これが一番よいとの近思組の申し合わせとなつたのです。理不尽と思われましようが、とにかく私もそれに従わなければならぬのです」

「あなた方は卑怯でございます」

「そう罵られても仕方ない。私も反対したのですが、千秋殿とのかつことを知っておる者は、私情だとしてきいてくれません。それで籤を引いたら、皮肉なことに私に当たってしまった」

「父を斬りにおいでになるのなら、わたくしたちが、素直にしているとお願いでございませるか」

「いや、だから知らせに参つた。千秋殿と刃をあわせるのはつらい。仲間を裏切ることになるが、とにかく私は血を見たくないのです。あとのことは気にせず、今夜のうちに脱藩されるよう甚左衛門殿におすすめください。できれば千秋殿も、ご姉妹とともに逃げられたがよい。たしか、肥前に親戚がおありとか聞いていたが、そこまでも追手をむけるようなことにはなりま

せん」

「父に伝えることだけはお約束いたします」

「今の私の氣持を、わかつてもらえるだろうか」

「誠之介様、では、これでお別れでございますね」と、千秋は困惑した表情の彼をみつめながら、息をつめるようにしていった。「わたくしを、もう一度、この森で抱いてくださいまし」

誠之介は、狼狽して、後ずさりする。

千秋は、先に立って足早にあるきはじめた。楠や鳶の巻きついた雑木が生い茂る森の中は、夕暮れのような暗がりやよんでいる。立ち止まって耳を澄ますと案の定、誠之介が追ってくる氣配はなかった。

あの日、千秋は誠之介に誘い出され、ここで待っていた。やはり早春の晴れた午後だった。揺らぎながら現れた影が突進してきて、うむをいわず落葉の上に押し倒されたときの記憶が、まだそのふくよかな胸に、なまなましい疼きをとどめている。

誠之介が、千秋を避けるようになったのは、それから間もなくのことである。いずれしかるべき人を立てて、話を進めたいといっていた誠之介から、その後なんの連絡もないまま日が過ぎていく。

婚礼が済むまで、からだを与えるのではなかったと、ひどい後悔におそわれた。要求をあまり抵抗もせずに受け入れた自分を蔑む男の身勝手さ、それを恨みながらも、やはり誠之介への思慕を断ち切れずにきたのだ。

彼が遠ざかっていった理由が、考えていたようなことではないと知ったとき、千秋は女とし

て一瞬すくわれた氣持になった。しかし、今となつては、それはもう、どうでもよいことに思われてくる。

父にたいする批判をにかけて、刺客に選ばれた事情を告げ、倉皇と去つていこうとする男にむける新たな憤りを、千秋は覚えた。同志を裏切り密告して、逃げろという。それも自分の手を汚さないための、こずるい策略としかいえないものだ――。

そのままひとり薄闇のなかの楠の根本に、尻餅をついたようにうずくまって、千秋は目をとじた。腐蝕をはじめた落葉のにおいが、むなしくもなつかしい。そんな恰好で骸となり、朽ちていく自分の姿を、千秋は空想した。

文政十三年二月初旬。あと十ヵ月で、うちそとの不安に充ちた天保時代の幕がひらくころである。

2

佐野家の門は、二階造りの長屋門だから見上げるほどに大きい。廃絶した家老の屋敷を拝領したのは、甚左衛門が勘定方頭取に就任した五年前のことだ。六十石だった彼は、そのとき加増されて二百石となった。異例の昇進である。そこから酷薄な甚左衛門の活動がはじまる。

農商民には苛斂誅求の租税をおしつけ、それに行きづまると藩士の俸禄を大幅にけずって、くるしい藩財政の穴埋めとした。

藩士たちのあいだに怨嗟えんさの聲があがり、佐野家のその門が、城下の人々の目には、いかにも苛政かせいを象徴するかのような、おどろおどろしい姿に見えたことである。

千秋は、ひっそりとした手つきで潜り戸をひらいた。門を入ってすぐの左隅に、梅の老木が一本植わっている。花は盛りをすぎたころだが、まだかすかな匂いが、そこはかとなくあたりを漂もよほっていた。

藩主の毛利元義もとよしも一度、梅の季節にここを訪れたことがある。

「おそれながら、梅門公をお俣しほび申しあげる景色にござります」

甚左衛門がいったのを、

「甚左はひどいことを申す。僂こふとは死んだ者に対していうのだ。そのようなときは、思いおこさせる、でなくてはかなうまい」

と、元義から笑ってたしなめられ、父がみじめに恐縮していたのを、千秋は憶おもえている。

元義は、風流人として知られていた。それは領内だけでなく、江戸で評判になっていることが、本人も自慢だった。参勤交代で江戸に出る度に、元義は狂歌師の四方真顔よのまがほ——蜀山人しよさんじんの弟子——を藩邸にまねき入門して、梅の門真門うめかどという判者名はんしやめいを受けた。文政五年のことだから元義が三十八歳のときである。

その折、元義が作詞した披露曲『梅の春』は、清元延寿太夫の作曲によるもので、その後も清元の名曲としてうたわれている。

四方にめぐる

扇ども多や文車ふぐろまの

ゆるしの色もきのふけふ

心ばかりは春霞

引くも恥かし爪じるし

雪の梅の門ほんのりと

にはふ朝日は赤間なる

すずりの海の青畳……

『梅の春』は、元義の知行地五万石の長府城下から望む関門海峡のながめを語り出しに、江戸は隅田川の春景色、吉原、今戸あたりの風情を諷った祝儀物である。

その歌詞のなかの「梅の門」をもじって、元義は梅門公と呼ばれた。みずから風流人をもつて任ずる彼の得意顔に、へつらうような甚左衛門の不用意なことばを、元義自身の口から嘲笑されたのだ。千秋は、自分たちが住む家の、梅のそばを通りすぎるたびに、あのころの父のこととを、ある哀しみをもって思い出すようになっていた。

「えらく遅いではありませんか」

裏庭から現れた姉の千夏に声をかけられて、千秋はどもりながら神社に参拝してきたのだと言いつけているうち、真っ先に告げなければならぬ一大事を言いそびれてしまい、そのまま擦りぬけて行こうとした。

「なにをしていたのです」

千夏は追いかけてきて、妹の帯についていた枯れ葉をつまみとり、ひらひらと振ってみせる。不覚にも千秋は、顔を赤らめた。すると耳たぶまでも染まってしまう。

「宮の森で鬼ごっこでもしたのですか」

と、千夏が意味ありげに笑った。早くに母に死なれてから、長女の千夏は母親代わりとなり、二人の妹たちの面倒をみてきた。二十六歳の晩婚だったが、前年の春、藩士のちぞいの後添のちぞいに迎えられながら、不和のため離縁されて実家に帰ってきた。勝ち気な性格が、優柔不断な夫に我慢できなくなったのが本当の理由らしい。

五つちがいの千秋、末の妹が千春ちはるでことし十八になる。

三姉妹そろって城下でも評判の美形、気性が激しく、しかも鐘捲流小太刀かねまきりゆうこたての名手ということになっている。武芸を好む父親にそれをすすめられた娘たちは、いつの間にか男をしのぎ、切紙きりしをもらうほどにもなっている。親の素質を享けたのであろう。男の兄弟ならよかったのにと、そんなことも人々の話題にのぼった。

「千春も鬼ごっこでしょかねえ、道場からまだ帰らない」

皮肉をこめてまた笑う千夏にむきなおり、

「わたくし、誠之介様に会ってまいりました」

と、千秋はようやく平静をとりもどしていった。

「そうだろうと思いました。鬼ごっこのお相手は大庭誠之介さんでしたか」

「そんなことより姉上様、お話が……」

誠之介から聞いたことを千秋が一気に報告すると、千夏は絶句して立ちすくんでいたが、暗い声でつぶやくようにいった。

「中へ、とにかく中へ入りましょう」